12月豊橋市議会傍聴記 ㊤

地方政治クリエイト 伊藤 秀昭

不退の覚悟で未来を切り開け

豊橋市議会12月定例会本会議は5日、再開し、佐原光一市長が11月28日に行った三期目の佐原市政を始めるにあたっての「所信表明」について4会派が代表質問を行った。

■未来（あす）を創る

自民党豊橋市議団を代表して登壇した杉浦正和氏は「激動する時代の中で迎えるこれからの4年間で、10年後、20年後の豊橋市には少子高齢化、労働人口の減少などの問題が確実に顕在化してくることが予想される。それらは経済、財政の縮小を招くことになることから、どのようにして社会的変化に対応し、生産性を向上させていくのか、それを行政サービスや子どもたちの教育にどう反映させていくのか」と質問した。

市長は「第4次産業革命と呼ばれている大きな流れの中で、本市の産業がこの流れに取り残されないようにするためには、それを担う人材の確保・育成に努めることが必要である。そのためにも豊橋発の新たなAI（人工知能）化技術を生み出す環境づくりに努めていく」とし、行政サービスにおいては「AIと人にしかできない分野との役割を分担し、生産性を向上させていく」、そして「豊橋ならではの教育への支援を充実し、未来を切り開いていく子供の育成につなげたい」と答えた。

質問者の的確な時代認識と、市長の未来への責任感溢れる議論だった。

■切れ目のない子育て支援

公明党豊橋市議団を代表して質問した沢田都史子氏は、切れ目のない子育て支援について聞いた。

市長は「子育ての様々な相談に対応する総合相談窓口を保健所・保健センターとこども未来館に設置し、市と子育て家庭がつながる取り組みを始めた。また仕事と子育てを両立できる環境の整備として保育環境の充実に取り組んできた」と答え、沢田氏は「今後どのように充実していくか」との再質問に市長は「要保護児童対策の機能と、不登校や引きこもりの子ども・若者の相談・支援を行う機能を集約し、一体的に運営する新たな拠点を、来年度こども未来館に隣接して整備していく」とした。

豊橋の子育て支援策は、また一歩充実していく。

ただ豊橋の子育て支援策のどこが手薄になって子育て世代が不安になっているのかの子育て現場からの問題提起が欲しかった。19分も質問時間を残していたのだから。

■豊橋から東三河を元気に

まちフォーラムを代表して質問した星野隆輝氏は、新たな東三河の地域づくりについて問題提起し、豊橋市としての推進すべき事業や果たすべき責務の考え方について取り上げた。

市長は「広域連合が優先的に取り組む課題は、東三河全体の魅力づくりであり、そのためにも国県からの権限移譲が重要。

また、広域連合の羅針盤となるべき総合戦略、人口ビジョンを策定中でもあり、構成8市町村の視点を持ちながら、地域内の人口の半分を占める豊橋から東三河全体を元気にしたい」と答えた。

星野氏は「東三河が選んだ地方創生、地方分権の形としての広域連合に失敗は許されない」と広域連合長としての市長に期待した。

■市民の生活実態に寄り添う市政を

日本共産党市議団を代表して質問に立った齋藤啓氏は、日本社会は国政の問題でも外交平和の問題でも大きな転換期を迎えているとし、その中で行われた市長選挙は史上最低の低投票率が大きな特徴だったとして、その要因は相手候補が市内在住でないことを市長は繰り返し取り上げたことを問題視した。

市長は「市民生活の実態をどれだけつかんでいるかを強調した」と釈明したが、齋藤氏は市民の生活実態に正確に目を向け、生活の不安、低年金、老老介護など様々な不安要素を抱えて暮らしている人たちに応える市政であってほしいと注文した。

齋藤氏は「今後、施策の背景にある市長の思いを議会で議論を重ねていく」としたが、今後に注目したい。